

『クラリッサ』におけることばと意味

—— 解釈をめぐる諸問題について ——

村瀬 順子

十八世紀のイギリスの小説家サミュエル・リチャードソンによって書かれた小説『クラリッサ』は、出版当初から作者の意図に反する様々な解釈を生み、その傾向は今日、脱構築を初めとする理論的研究の高まりの中でますます強くなっている。Fredric Jameson は、その著 *The Prison-House of Language* の中で、テクストと意味の間には常にギャップがあり、そこから無限の解釈が生まれると述べているが、この小説の場合、ことばからいかに意味を読み取るかという問題は、テクストを読む読者の問題である以前にすでに作品内の人間関係の読みと提示として提示されている。『クラリッサ』において人間関係の媒介をなすのはそれぞれ的人物が書く手紙であり、相手のことばをお互いにどう読み取っていくかという、読みに絡む心理的葛藤が物語を進行させていくからだ。さらに、すべてが複数の人物の意図的・主観的な手紙によって語られる書簡体小説においては、全知の作者の公正で客観的な視点を示す場がないため、読者には作中で起こったであろう事件や事実といったものを客観的に知る方法はない。その結果読者は作中の人物達の、時として拮抗し合う視点から書かれた手紙の中に事実や真理を読み取ろうとして、人物達が繰り広げる読みの葛藤の中に際限なく巻き込まれていく可能性をこの作品はもっている。ここでは、クラリッサを中心に作品内の人物がどのよ

うな読みの葛藤を展開していくかという問題を、人はいかにことばから意味を読み取るかという観点から考えてみたい。

この小説の中で、もつとも精神的な書き手はクラリッサとラブレイスであるが、ことばをどうとらえるかという点では両者は全く異なっている。クラリッサを特色づけるものは一言でいえば、ことばへの信頼であろう。クラリッサにとって、ことばは心の真実をあらわすものであり、誠実、正義、真理といったものを忠実に写すものと考えている。手紙はそうした心の真実をあらわしているがゆえにクラリッサにとっては、非常に価値があり、大事なものである。しかし、クラリッサのこうしたことばへの信頼は、複雑な利害のからみあった人間関係の中で、裏切られていく。クラリッサの雄弁は徳の高さを表しているのだという見方から、ひょっとしてあれは人の心をつかむ便法ではないかというふうにも周囲の見方が変わったとすれば、それはラブレイスとの一件よりも先に、祖父の遺産を父や兄姉を通り越して相続したことに端を発していると言えるだろう。クラリッサのことばを文字通りに信じられなくなった彼らは、クラリッサのことばの裏を読もうとする。つまり、クラリッサが実際に語ることはではなく、むしろ語らないことばの中に真意を読み取ろうとするのである。ソームズとの結婚を強制しようとする彼らは、生理的嫌悪を理由に結婚を拒否しようとするクラリッサのことばをさまざまに解釈する。つまり、ソームズを拒否するのは親の権威に対する反抗であり、それはラブレイスを愛しているからであり、一生独身で暮らすというのは単なる言い逃れにすぎないというわけである。こころの真実を伝え、誠意を尽くさずれば本当の意味が伝わるものだと固く信じて疑わないクラリッサは、なんとか議論を重ねることによって

誤解を解こうとする。しかし、家族がもはやクラリッサのことは信用せず、ことばの裏を恣意的に読み込もうとする限り、議論は空転するのみである。しかも、彼らはクラリッサからペンとインクを取り上げ、さらに部屋の中に監禁することによって言語的にも肉体的にも弾圧をはかろうとする。

家族から迫害を受けるクラリッサにとってただ一人の理解者は親友のアナであり、アナだけはクラリッサの気持ちを理解し、父親の権威に名を借りたハーロウ家の横暴を見抜いているかに見える。しかし、ここでも読みの葛藤が起こっていることに読者は気づくだろう。実はアナもまたクラリッサが本当はラブレイスを愛しているのではないかと疑っているからだ。アナはクラリッサがその点をはつきりさせないのが不満であり、クラリッサに「心の奥の隅々」まで白状するように要求し、そうしないのは「互いに誓い合った至高の友情に対する裏切り」であるとクラリッサを責める。アナもまたクラリッサのことばを文字通りに受けとめるのではなく、クラリッサのことばの行間を読もうとしているのである。しかし、アナがクラリッサの手紙の行間に間違いなく読み取っていると思っているその真意とは、実はラブレイスに対するアナ自身の憧れを投影しているにすぎないのかもしれない。アナはクラリッサの手紙の読み手として、読者の読みを誘導する役割を担っているが、アナの読みも中立ではなく個人的な動機に基づいていることを考えると、アナの読みが正しいかどうかという判断は難しくなる。ハーロウ家の人達がたとえラブレイスとの仲を疑おうとも自己の潔白を信じるクラリッサの信念は揺るがなかった。それに対して、アナはクラリッサの半ば無意識の願望とも言うべき心の領域に踏み込むことによってクラリッサの精神が拠つて立

つ自己なるものを内側からゆるがす結果をもたらしたと言えるだろう。クラリッサのことばを信用せず、ことばの裏を読もうとするハーロウ家の人々と同様、いやそれ以上にアナはクラリッサに対して、読みの暴力を与えているのかも知れない。

クラリッサに最大の読みの暴力を与え、さらに肉体の暴力へと及ぶのはラブレイスである。ラブレイスにとって、ことばは意味に縛られることのない一種のゲームであり、ラブレイスはクラリッサのことばへの信頼を逆手に取って、クラリッサがそこに意味を読み込むことを見越したうえで、ことばを巧みに操り、クラリッサをだまそうとしている。ロンドンの売春宿を上品な下宿屋と思わせてクラリッサを住ませたり、トムリンソンという人物をでっちあげてクラリッサとハーロー叔父の仲介者と見せかけたり、アナからの手紙を横取りするために茶番劇を演じたりと、クラリッサを取り巻く深刻な世界にラブレイスはコミカルな要素を持ち込むことで、クラリッサ的世界の転覆を図ろうとする。

しかし、クラリッサをレイブすることで暴力的にクラリッサを征服しようというラブレイスのもくろみに反して、レイブを境にクラリッサとラブレイスの立場は逆転する。ラブレイスはクラリッサをひとりの女として読み取ろうとして、逆にただの低俗な男としての自分をさらけ出すことになり、それに対してクラリッサはラブレイスの正体を見抜き、ラブレイスを軽蔑することで、精神的に優位に立つからだ。この後、結婚によって罪を償いたいとするラブレイスや同じくそれを勧める周囲の人々の願いを押し切つて、死を決意するクラリッサには、他者の介入を許さない毅然とした態度、そして憤然として自己を主張しようとする強い意志を見ることができ

ライブレースと結婚することはラブレイスが自分に対して行った野蛮な行為を認めることであるとして結婚を拒否するクラリッサの考え方は妥当であるとしても、クラリッサの死はレイブの当然の帰結ではなく、クラリッサの意志による選択である。何故、クラリッサには死ぬ必要があったのだろうか。Terry Eagletonはクラリッサの死について、現実的にとらえることは難しいとした上で、神の救いだけを信じて複雑に絡まった糸を一举に切り捨てようとする「ユートピア的超越」であると解釈している。それに対して Terry Castle は、人生を読むことをやめて沈黙の中に逃げ込むこと、と解釈している。私は、数々の読みの暴力にさらされてきたクラリッサが、クリスチャンとしての死を目指すことで、今度は自分自身の「読み」を主張しようとしたのだと思う。そのクラリッサの「読み」とは、まさに女性の模範として美德と崇高な精神を持ち、神の救いによって勝利者になることである。かつて、ラブレイスに対する愛情と抑圧の中で見せたクラリッサの暖昧さや矛盾はすべてこの「読み」の中に解消されてしまう。死の準備をしながら死に装束を結婚衣装と呼ぶクラリッサには、この世において実現できなかった結婚というものに対する屈折した心理やマゾヒスティックな心理が伺われるが、それもすべて、この「読み」の中に呑み込まれてしまう。そして、クラリッサの熱烈な崇拜者になるベルフォードやアナのみならず、ラブレイスまでもが、最終的にこのクラリッサの「読み」を受け入れざるをえないことよって、このクラリッサの「読み」はもはやクラリッサだけの恣意的な「読み」と思えないような権威をこの作品の中で持ち始める。作者はクラリッサの安らかな死を放蕩仲間ベルトンのみじめな死やシンクレア夫人のグロテスクな死と対比すること

よって、この世での罪業に対する神の審判が必ずあること、そして、それはそれぞれの死に様の中にすでに表れていることを暗示し、クラリッサの気高い精神が死後においてきつと報われるものであることを証明することよって、クラリッサの「読み」を正当化し、ロラン・バルトのことは借りて言えば“naturalize”していると言えるのではないだろうか。

このようなクラリッサの「読み」をクラリッサの本質とみなすか、ごう慢とみなすかは読者の読みかたに委ねられていると言えるだろう。例えば、W. B. Warner はその著 *Reading Clarissa: The Struggles of Interpretation* の中で、クラリッサの死を、自分を死に追いやった人々の責任を問い、自己の勝利を確保するための戦略であると論じている。それを受けて、Terry Castle は *Clarissa's Cyphers* の中で、Warner のクラリッサ攻撃には、女性性が自己の物語を語る力を持つことに対する、いかにも男性的な偏見が表れていると批判しているが、『クラリッサ』をめぐる論議は今後、ますます活発化しそうである。